

青島小中学校の道越賢代、美校長から電話があつたのは、もうかれこれ10年前になる。「松浦の青島で講演をやってもらえないか」との依頼であつた。それ

までもあちこちの学校から呼ばれて講演をした経験はある。その経験からすれば、講演をした後にはどこか空しさが残っていた。「もっと、なにかできなかつたのか」という空しきである。

「それなら民話ミュージカルをやりませんか」と提案した。幸い、道越先生はこの提案を取り上げてくれた。NBCも取材に

入ってくれた。5月に青島に渡り、生徒や先生、保護者と面談をした。保護者の一人、谷川一寿さんは家でチームに朝食までご馳走してくれた。夜は刺し身と青島かまぼこの大皿である。

青島には「長者と河太郎」という民話がある。昔、青島は三

## 故郷で続く民話劇

つの島に分かれていたそうだが。海には河童の河太郎一族がいた。長者は河太郎を落とし穴で生け捕る。「ああ、また人間に騙された。まったく人間という奴は」。長者は団子とキュウリ

を餌に、河太郎に三つの島に石で橋を架ける工事を頼む。工事は完成し、人間と河太郎も仲よくなる。河太郎の頭は疲れから

倒れ、「七郎神社の見える丘にお墓を建てておくれ」といい残り、息を引き取る。長者は遺言通りに墓石を建て、ねんころに吊った。

その墓石は、いまも松尾山の畔に残っており、青島の人は毎年7月13日には団子やキュウ

りを供えてお礼をしているらしい。これを民話ミュージカルとして書いた。歌唱指導や振り付けは東京からプロに来てもらった。保護者も先生も生徒も一丸

同行してくれた。継続すること

となつて演じた。正月の我が家の集まりではいまだに青島は語り草である。青島に同行してくれたのは市

議会議員の友田吉泰氏であつた。友田さんとは松浦商工会議

所青年部の講演で知り合った。20歳の年の違いはあるが、よく

わたくしの考えを理解してくれて

を決めたのは松尾紘教育長である。この例は全国にもない。こんなに行動力のある教育長も知らない。ミュージカルをやった生徒は声も姿勢もシャキッとす。自慢していい。その席にも友田さんはいた。昨年は星鹿小

学校であつた。韋駄天走りである。当時、青島で民話劇を演じた小学5年生だった谷川一寿さんのご子息谷川千広くんが、今夏、わたしのチームに出演することが決まり、新宿の紀伊國屋ホールでデビューをする。20歳になつた。故郷松浦にも凱旋公演である。運のいい奴はいらぬものだ。「運も実力のうち」という。しかし、これからは「千広」とわたしに怒鳴られることになる。因縁を感じる。



おかへ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜世子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会全理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)